



## Lesson 4

## 沖縄の歌と踊り

## Okinawan Songs and Dances

## Learning

Students will be able to:

1. sing *Tinsagu nu hana* and describe the forms of Ryukyu Poetry (*Ryuuka*).
2. cite one of the poems by Chiru Yoshiya and Nabe Onna.
3. explain the basic characteristics of *Kachaashii* and participate in the *Kachaashii* dance.



沖縄は「芸能の島」と呼ばれています。どこへ行っても、琉球民謡が聞こえてくるからです。それほど沖縄の人は芸能が好きなのです。お祝いや祭りなど、嬉しいとき、悲しいときにも、サンシン（三線）を奏で踊ります。戦争でアメリカ軍の捕虜になっても、収容所では缶詰の空き缶を利用してサンシンを作り、敗戦の悲しみを曲にのせていました。

## (1) 琉球音楽

沖縄の音楽と日本の他の地方の音楽では曲の雰囲気の違いが違います。音階が違うからです。日本の音階は「ド・レ・ミ・ソ・ラ」ですが、沖縄の音階は「ド・ミ・ファ・ソ・シ」です。

音楽の種類には、「民謡」と「古典音楽」があります。民謡は庶民の歌で、古典音楽は琉球王国があった時代に、中国の使節をもてなすために作られた音楽です。それはサンシンを中心に発達してきました。サンシンは14～15世紀ごろ唐(中国)から琉球に入って、後に日本に伝わりました。古典音楽はサンシン、琴、笛、太鼓、胡弓などによって演奏されます。

沖縄の新しい民謡「花」(喜納昌吉作词作曲)は、世界的に広く歌われています。このような新しい民謡が今でも一日に一曲は生まれ続けているのです。

(2) 琉球舞踊

琉球舞踊は、「古典舞踊」「雑踊り」「民俗舞踊」の三つに大きく分けられます。「古典舞踊」は、18世紀頃に玉城朝薫によって、完成された「組踊り」が基礎になっています。「組踊り」とは、今でいう舞踊劇のことです。古典舞踊には男踊りと女踊りがあります。宮廷舞踊として発達したため、気品があり優雅です。代表的なものに「四つ竹踊り」「かせかけ」などがあります。

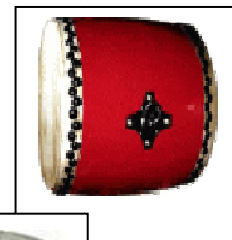


「雑踊り」は明治以降に創作された新しい踊りです。テンポが早く、南国の明るい生活感情を表現しています。「浜千鳥」「谷茶前」は広く親しまれています。

「民俗舞踊」は沖縄各地域の民俗行事、祭りの時の踊りです。獅子舞など、その種類もたくさんあって、特に離島の宮古、八重山地方は民俗芸能の宝庫だと言われています。

また、太鼓を伴奏に家々を巡って歩く盆踊り「エイサー」は、よく知られています。毎年8月～9月頃各地で「エイサー大会」が賑やかに行われ、観光の目玉となっています。

また、エイサーは学校教育にも取り入れられ、沖縄の子供たちは早くから沖縄のリズムに親しんでいます。



## TIPS

ちょっと ひとつ

## カチャーシー

祭りの終わりや祝宴の終わる頃になると、必ず飛び出してくるのが、カチャーシー。男女一緒にあって、自由に愉快地踊ります。底抜けに明るくてエネルギーッシュな踊りは見ていられる方もつられて踊ってしまうほどで、沖縄中どこでも見られる光景です。本土の阿波踊りに似ています。

## カチャーシーの踊り方

腕を伸ばして両手を真上にあげて、手のひらを開いて前に向ける。

男性は手を握る。女性は広げたままで良い。

扉を開けるように、両手のひらを右に向けて、腕を右に振る

扉を閉めるように、両手のひらを左に向けて、腕を左に振る。

リズムに乗って、ハイーヤイヤと囃子を入れると盛り上がる。



世界のウチナーンチュ大会 <sup>りゅうか</sup>カチャーシーを踊る



(1) <sup>りゅうか とくちよう</sup>琉歌の特徴

①

けふのほこらしやや  
なをにぎやなたてる  
つぼでをる花の  
露きやたごと

<sup>おきなわ</sup>沖縄の、<sup>いわ</sup>お祝いの座は、<sup>さ</sup>左の「<sup>うた</sup>歌」で始まります。<sup>さんしん</sup>三線が<sup>ひ</sup>弾かれ、<sup>おど</sup>踊り手が<sup>て</sup>登場し、<sup>とうじよう</sup>華やかに、<sup>はな</sup>お祝いの座が<sup>ひら</sup>開いていきます。<sup>あさひ</sup>朝日にきらめく「<sup>つゆ</sup>露」を<sup>はなひら</sup>あびて花開いていく「<sup>つぼみ</sup>つぼみ」を<sup>ひ</sup>引き合いにして<sup>うた</sup>歌われた「<sup>うた</sup>歌」は、お祝いの座に<sup>ふさわし</sup>ふさわしい「<sup>うた</sup>歌」であります。それは、みごとな「<sup>けいしき</sup>形式」を<sup>ふ</sup>踏まえて歌われていました。

②

てんしやごの花や  
爪先に染めて  
親の寄せ言や  
肝に染めれ

②の歌は、<sup>いろ</sup>花の色で<sup>つめさき</sup>爪先を<sup>そ</sup>染めるように、<sup>おや</sup>親の<sup>ことば</sup>言葉は、<sup>こころ</sup>心に<sup>そ</sup>染めなさいと歌われています。<sup>おきなわ</sup>沖縄で、<sup>し</sup>もっともよく知られた「<sup>うた</sup>歌」の一つで<sup>きょうくんか</sup>教訓歌となっています。①の「<sup>うた</sup>歌」と同じく、<sup>おきなわ</sup>沖縄の「<sup>うた</sup>歌」の<sup>とくしよく</sup>特色をなす「<sup>けいしき</sup>形式」を<sup>ふ</sup>踏まえて<sup>うた</sup>うたわれた<sup>てんけいてき</sup>典型的な「<sup>うた</sup>歌」であります。しかし、それは、<sup>か</sup>書き

<sup>あらわ</sup>表されている文字をそのまま<sup>よ</sup>読んではよくわからないものなのです。

沖縄の「<sup>うた</sup>歌」は、沖縄の<sup>ことば</sup>言葉で読まれます。二つの「<sup>うた</sup>歌」を、沖縄の読み方にしたがって<sup>あらわ</sup>書き表しますと、以下ようになります。

① キユヌフクラシャヤ  
ナヲウニジャナタティル  
ツイブディヲウルハナヌ  
ツイユチャタグトウ

② ティンシャグヌハナヤ  
ツイミサチニスミティ  
ウヤヌユシグトウヤ  
チムニスミリ

沖縄の歌は、書き表<sup>あらわ</sup>されている文字<sup>もじ</sup>をそのまま読むということをしません。文字は、「歌」を書き表すために、借りてこられたものなのです。すなわち、書き表された文字を、沖縄の言葉<sup>ことば</sup>で読むわけです。「歌」を、沖縄の読み方<sup>かた</sup>にしたがって読み直<sup>なお</sup>してみますと八、八、八、六に区切<sup>くぎ</sup>られて読まれていることがわかります。この「八、八、八、六」の「形式<sup>けいしき</sup>」になる「歌」が、「琉歌<sup>りゅうか</sup>」と呼ば<sup>よ</sup>ばれるものなのです。

③

語りたや語りたや  
月の山の端にかかるまでも  
(カタイタヤ カタイタヤ  
ツィチヌヤマヌフワニ カカルマディン)

しかし、「琉歌」は、八、八、八、六の四句三十音<sup>くおん</sup>からなる「歌」だけを指<sup>さ</sup>すわけではありません。例えば、③の歌のような、五、五、八、六音<sup>なかつう</sup>からなる「仲風」と呼ばれる形式<sup>けいしき</sup>や、④のように七、五音

④

旅の出立 観音堂  
千手観音 伏し拝で  
黄金杓取て 立ち別る

で歌われていく「口説<sup>くどうち</sup>」とよばれる形式、さらには八音を連ねていって六音で結ぶ<sup>むす</sup>手紙文<sup>てがみぶん</sup>のかたちをとった「つらね」と呼ばれる形式の歌などもあります。

その中で、沖縄の人たちが好んで歌ってきたのが八、八、八、六音の四句三十音になる形式の歌です。「琉歌集<sup>しゅうおき</sup>」に納められた歌は、圧倒的にこの形式で占められています。「琉歌」という場合、三十音になる「歌」をさすようになるのも、まず、この形式の歌がもっとも好まれたこと、そして「琉歌集」が、この形式になる歌を集めていたということにあるといっていでしょう。

「琉歌」は、定型になる歌であるという大きな特色<sup>とくしよく</sup>とともに、ある時期<sup>じき</sup>まで「歌われた歌」であったということがあります。

お祝いの座<sup>いわざ</sup>で歌われる歌は、「かぎやで風節<sup>ふうぶし</sup>」または「御前風節<sup>ぐじんふうぶし</sup>」といわれる三線の曲<sup>さんしんきょく</sup>にのせてうたわれます。親の言葉<sup>おやことば</sup>は、忘れないように心<sup>こころ</sup>にとめなさいと歌われた歌も、やは

り三線<sup>ひ</sup>で弾かれ歌われてきました。

## (2) 和歌と琉歌

日本の代表的な定型表現である「和歌」はよく知られているとおり五、七、五、七、七の五句三十一文字で読まれています。それにたいして「琉歌」は八、八、八、六音四句三十音で歌われています。

その形式が、どこから出てきたかについては、いろいろな考え方があります。代表的な考え方は、大きく二つに分けられます。その一つは、沖縄の古い歌にあるとする考え方があります。あとの一つは、日本の歌にあるとする考え方です。

沖縄と日本との関係が深いことからして日本の歌の影響を無視することはできないでしょうし、それ以上に、沖縄の古い歌を忘れてはいけません。

「琉歌」の四句三十音の形式が成立したのは、1500年前後だろうと言われています。それ以上のことは、はっきりしませんが、「琉歌」が歌われる「歌」であったこと、「三線」に乗せられて広まったということは疑いありません。

## (3) 女流歌人：恩納ナベとよしやチル

「琉歌」は、国王はじめ、ありとあらゆる位の人<sup>くら</sup>いに好んで歌われたもの<sup>この</sup>だと言われます。そのなかで、琉歌の名人として、もっともよく知られたのに恩納ナベとよしやチルがいます。

恩納の歌には、次のようなのが残っています。

⑤

恩納岳あがた 里が生まれ島  
もりもおしのけて こがたなさな  
(ウンナダキアガタ サトウガウマリジマ  
ムインウシヌキティ クガタナサナ)

⑥

あねべたやよかて しのぐしち遊で  
わすた世になれば おとめされて  
(アニビタヤユカティ シヌグシチアスイディ  
ワスイタユニナリバ ウトゥミサリティ)



おんな  
恩納ナベの歌碑 (恩名村)

⑤の歌の意味は「<sup>おんなだけ</sup>恩納岳の<sup>むこう</sup>むこうに<sup>こいびと</sup>恋人の<sup>うま</sup>生れた<sup>むら</sup>村がある。山をおしのけて、こちらに<sup>ひ</sup>引き<sup>よ</sup>寄せたいものだ」といったのであり、⑥は「<sup>かみあそ</sup>神遊びができたお姉さんたちの時代がうらやましい。<sup>わたし</sup>私たちの時代にはそれができなくなってしまった」というものです。

よしやの歌には、次のような歌が<sup>つた</sup>伝えられています。

⑦

及ばらぬとめば 思い増す鏡  
影やちやうもうつつ 拝みぼしやの  
(ウユバラヌトウミバ ウムイマスカガミ  
カジャチョンウツチ ウガミブシヤヌ)

⑧

恨む比謝橋や わぬ渡さともて  
情ないぬ人のかけておきやら  
(ウラムフィジャバシヤ ワンワタサトウムティ  
ナサキネンフィットウヌ カキティウチャラ)



よしやチルの歌碑  
(読谷村)

⑦の歌の意味は「<sup>いっしょ</sup>一緒になれないと思えば<sup>おも</sup>思うほど、ますます思い<sup>う</sup>浮かんでくるあなたの<sup>おもかげ</sup>面影を、<sup>かがみ</sup>せめて鏡にでもうつつしておがみたい」というのであり、⑧は「<sup>ひじゃばし</sup>比謝橋は、私を<sup>わた</sup>渡そうと思って、<sup>おも</sup>おもいやりのない人が、<sup>うら</sup>かけておいたのだろうか、恨めしいことだ」と歌っています。

恩納ナベとよしやチルがよく<sup>いっしょ</sup>一緒に取り上げられるのは、歌がすぐれていることもありますが、それ以上に、歌そのものが<sup>たいしょうき</sup>対照的であるからでしょう。

恩納の歌が<sup>そぼく</sup>素朴で<sup>じょうねつき</sup>情熱的であるのに比べ、よしやの歌は<sup>くら</sup>技巧にすぐれ<sup>ぎこう</sup>内向的<sup>ないこうき</sup>なものになっています。歌の<sup>ちが</sup>違いは、恩納の「歌」が「わたしたち」の<sup>せかい</sup>世界でうたっているのに対し、よしやの「歌」は「わたし」の世界でうたわれているところにあるとい

っていいでしょう。<sup>でんしょう</sup>伝承によれば、<sup>のうふ</sup>恩納が農婦であり、<sup>ゆうじよ</sup>よしやは遊女であったといわれているのも理由がないことではないのです。

「琉歌」<sup>おほ</sup>の多くは、<sup>さくしやめい</sup>作者名がわかりません。<sup>めいか</sup>名歌の<sup>かずかず</sup>数々が、作者のわからないものなかにみられます。「琉歌集」<sup>りゅうかしゅう</sup>に、<sup>きさい</sup>作者名が記載されるようになるのは、ずっとのちになつてからのことです。

#### (4) 季節の歌、恋の歌

沖縄は、日本に比べて<sup>くら</sup>季節感の乏しいところですが、季節をあらわす言葉がないわけはありません。例えば、⑨と⑩の歌にみられる「ワカナツ（若夏）」<sup>ミーニシ</sup>（新北風）」といった言葉がそうです。それは、<sup>なつ</sup>夏を迎える時期と<sup>むか</sup>冬を迎える時期とはあきらかに<sup>かん</sup>感じ取られるものとしてあったということでしょう。

⑨

若夏がなれば 心うかされて  
 でかやうまはだをよ 引きやり遊ば  
 (ワカナツィガナリバ ククルウカサリティ  
 ディカヨマハダヲウユ フィチャイアスイバ)

⑩

新北風吹きつめて 肌寒くなれば  
 ころも打つ音も しげくなゆさ  
 (ミニシフチツィミティ ハダサムクナリバ  
 クルムウツウトウン シジクナユサ)

「恋」の歌にも、<sup>すぐ</sup>優れた歌が多く見られます。

⑪

真白苧よさるち はたえん布織らば  
 あかぬ色染めれ かなし里前  
 (マシラヲウユサルチ ハテンヌヌウラバ  
 アカヌイルスミリ カナシサトウメ)



歌の意味は「真まっ白しろな糸いとで極上ごくじょうの布ぬのを織おりあげますので、美うつくしい色いろに染そめてください」というのであります。恋の歌の多くが、「布もち」を用いて歌われています。そしてそれは「染める」という言葉で、愛あいの深ふかさを、言いい表あらわすかたちになっています。

⑫

わくの糸いとかせに くり返し返し  
 かけて面影おもかげの まさて立ちゆさ  
 (ワクヌイトウカシニ クリカイシガイシ  
 カキティウムカジヌ マサティタチュサ)

琉歌こいの恋の歌の多くは、布せいかつを織みる生活みっちやくと密着おもかげしていたのですが、また、その多くが「面影おもかげ」の言葉もちを用いて歌われていました。そのことは、琉歌の恋歌の多くが、「思慕しぼの情じょう」を歌った歌であったということを示しているでしょうし、男女だんじょが、自由じゆうに会あえる時代じだいではなかったことを示してもいるはずです。

### (5) 琉歌しょうらいの将来すいたい：衰退うとハワイ生まれの琉歌

「琉歌」は、沖縄の言葉で歌われる定型表現ていけいひょうげんになる「歌」のことをさすものでした。それは、沖縄ほうげんの方言つかが使つかわれなくなれば、消きえてしまうということでもあります。

1879年、日本政府は「琉球処分せいふ」を行おこないます。琉球国王こくおうが、首里城しゅりじょうを出だされ、東京とうに移うつされ、琉球王国おうこくがなくなり、日本いちけんの一県よくねんになります。翌年、1880年、『沖縄対話たいわ』という、日本語ひょうじゆんご（標準語）を教える本が作られます。

1910年前後ぜんごになりますと、日本ゆうがくに遊学わかした若い人たちが、沖縄にもどりはじめます。彼らの帰郷きけんは、新しい時代の始まりを告げるものでありました。あらゆる場面つで、新しい運動ぼめんが始うんどうまりますが、とりわけ文芸面ぶんげいめんでの活動かつどうが活発かつぱつで、1909年に「琉歌大会たいかい」が開ひらかれたことを受けて、琉球うの「文芸復興ぶんげいふっこう」を主張しゅちようするようになります。1910年前後は、各地かくちの琉歌会かいが活発な活動を見せるようになり、「琉歌」の時代げんしゅつが現出めいじしますが、明治おわが終たいしょうり大正期きになりますと、急速きゅうそくに衰退すいたいしていきます。

以後沖繩では、琉歌が時代の主流になるということがなくなります。わずかに同好会が見られるだけになり、その活動もほとんど人に知られることのないものとなっていきます。

1950年代の半ば、沖繩では、琉歌の発表がほとんど見られなくなっていた時期、沖繩を遠く離れた地ハワイで、現地で刊行されていた日本語の新聞『ハワイ・タイムス』に、六首の「琉歌」が掲載されます。そのうちの四首は、次のようなものでした。

五十年振に我島立ち寄らば 胸や張りつまって涙が先に  
いくさ世の跡に生れ島行きば 道迷って立つど吾身の姿  
戦世も済まち一昔なても 今もうてちかに人の心  
忘られていすれば面影や増さて 昔眺めたる那覇の空や

歌には「五十年振りに帰省して其見た姿感じた事」を読んだものであるという詞書が添えられています。ハワイで刊行されていた日本語の新聞にこれらの歌が掲載されたのは、ハワイには沖繩出身者が数多くいたということによるものですが、大切なことは、沖繩でも見られなくなっていた「琉歌」が、ハワイの新聞に掲載されたということです。そして、57年以後70年代の初期まで『ハワイ・タイムス』『ハワイ報知』の両紙に、わずかだとはいえ琉歌が掲載されているのが見られます。

1977年『ハワイ・パシフィック・プレス』が創刊され、琉歌は、同紙の文芸欄を飾ることになります。

1979年、「ハワイ琉歌会」が創設されます。「ハワイ琉歌会」は、1990年まで五冊の同人歌集を刊行するまでになります。

「ハワイ琉歌会」の活動に刺激を受ける形で、沖繩では「琉歌募集」が行われるようになっていきます。一時まったく時代の表面から消えていた「琉歌」が、地域おこしの一環としてはじまった「募集琉歌」で、息を吹き返したようにもみえます。

沖繩では、琉歌同好会など見られるようになり、活気が出てきたように見受けられますが、琉歌の復興に大きな役割を果たしたといえる「ハワイ琉歌会」の活動は、そのまま続いていくとは考えられません。「琉歌」を詠む多くの方が高齢になっていること、沖繩の言葉を話す人がいなくなりつつあること、さらには、発表機関である日本語新聞の問題がある

ことで、「琉歌」の将来は、そう安泰ではないといった面があります。そしてそれは、将来の沖縄における琉歌の問題でもあるはずです。

### 沖縄の新しい歌

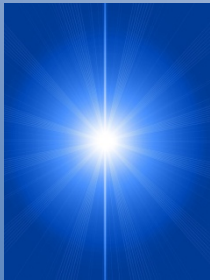


はな  
ていんさぐぬ花

はな ちみさち す  
ていんさぐぬ花や 爪先に染みてい  
うや ちむ す  
親ぬゆしぐとうや 肝に染みり

ていん ぶ ぶし ゆ ゆ  
天ぬ群り星や 読みば読まりしが  
うや ゆ  
親ぬゆしぐとうや 読みんならん

よる は ふに ぶし み あ  
夜走らす船や にぬふあ星目当てい  
わん な うや わ み あ  
我を生ちやる親や 我んどう目当てい



\* 歌詞の意味 \*

てんさぐの花（鳳仙花）は、爪先に染め、親の教えは、心に染めなさい。

空に輝く星は、教えようと思えば数えられるかもしれないが、親の教えてくれた事は、数えることができないほど多い。

よる こうかい ふね ほっきょくせい め あ わたし ちゅうしん  
 夜、航海する船は、北極星を目当てにして進む。私の親は、私を目当てにして（中心  
 にして）生きている。

なだ  
 涙 そうそう （ウチナーグチ・バージョン）



唄：夏川りみ

作詞：森山良子

ウチナーグチ訳詞：新城俊昭

作曲：BEGIN

なち くとうぼ  
 懐かしアルバムみくてい かふうしどーんでい言葉かき

いちんいちまでいん ちむ うち くくる ひとう  
 いちんいちまでいん肝ぬ内 心かきゆるあぬ人ゆ

は ひ あみ ひ う  
 晴りわたる日ん 雨ぬ日ん 浮かぶあぬちゅらさ

なち どうー  
 懐かさや遠く うむよーなていん

うむかじ かじた ひ なだ  
 面影とうみてい 影立ちゆる日や 涙そうそう

いちばんぶし にが わ なれー  
 一番星に願ゆん くりが我ぬ慣なてい

ゆまんぎぬ空見上げてい すら み あ ちむ  
 ゆまんぎぬ空見上げてい 肝ふくらまち うんじゅとうめゆん

なちかさていん ふくらしゃていん うむい  
 なちかさていん ふくらしゃていん 思やあぬちゅらさ

うんじゅぬ場所からわしがた  
 うんじゅぬ場所から我姿

み かなじいちか あ しん い  
 見らりりば かなじいちか 会ゆるんでい信じ 生きていんか

は ひ あみ ひ う  
 晴りわたる日ん 雨ぬ日ん 浮かぶあぬちゅらさ

なち どうー  
 懐かさや遠く うむよーなていん

く うむ ま なだ  
 さびしさぬ 恋いしさぬ 思いや増さてい 涙そうそう

あ うむ ま なだ  
 会いぶさぬ 会いぶさぬ 思いや増さてい 涙そうそう

どーぐわーやしちぬたんめーさい

どーぐわーやしちぬ

たんめーさい

あたびーとういが

めんそーらに

んむにーかむくとう

まっちょーけー

まっちん またらん

さち なやびら

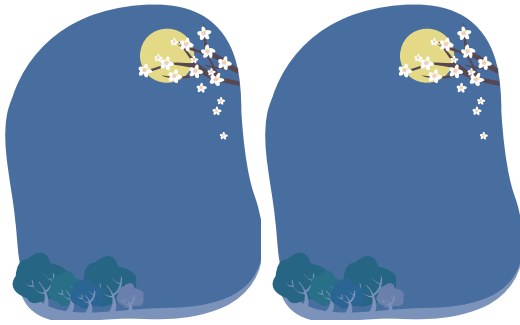


あさどや  
安里屋ユンタ

作詞：星 克

作曲：宮良 長包

1. サー <sup>きみ のなか</sup>君は野中の <sup>はな</sup>いばらの花か 「サーユイユイ」  
<sup>く かえ</sup>暮れて帰れば <sup>ひと</sup>やれほに引き止める  
 マタハーリヌ チンダラカヌシャマヨ  
 「イーヤ ハイヤイヤ ササ」
2. サー <sup>うれ はず</sup>嬉し恥かし <sup>うきな</sup>浮名をたてて 「サーユイユイ」  
<sup>ぬし しらゆり</sup>主は白百合 やれほにままならぬ  
 マタハーリヌ チンダラカヌシャマヨ  
 「イーヤ ハイヤイヤ ササ」
3. サー <sup>たぐさと</sup>田草取るなら <sup>いざよいつき</sup>十六夜月よ 「サーユイユイ」  
<sup>ふたり き みずい</sup>二人で気がねも やれほに水入らず  
 マタハーリヌ チンダラカヌシャマヨ  
 「イーヤ ハイヤイヤ ササ」
4. サー <sup>そ あ</sup>染めて上げましよ <sup>くんじ こそで</sup>紺地の小袖 「サーユイユイ」  
<sup>か なさけ たすき</sup>掛けておくれよ 情の襷  
 マタハーリヌ チンダラカヌシャマヨ  
 「イーヤ ハイヤイヤ ササ」
5. サー <sup>いちど</sup>ハワイよいとこ 一度はおいで 「サーユイユイ」  
<sup>はるなつあきふゆ しま</sup>春夏秋冬みどりの島よ  
 マタハーリヌ チンダラカヌシャマヨ  
 「イーヤ ハイヤイヤ ササ」
6. サー <sup>おきなわ</sup>沖縄よいとこ <sup>いちど</sup>一度はおいで 「サーユイユイ」  
<sup>はるなつあきふゆ しま</sup>春夏秋冬なさけの島よ  
 マタハーリヌ チンダラカヌシャマヨ  
 「イーヤ ハイヤイヤ ササ」



## Tasks & Discussions



1. Introduce as many songs by Nabe Onna and Chiru Yoshiya as you can find, and explain how you appreciate them.

(おんな 恩納ナベとさくひん よしやかずおお チルのしょうかい 作品を数多く紹介しあって、あじ 味わってみましょう。)

2. Let's sing *Tinsagu nu fana*, "Nada soosoo", etc., in *Uchinaaguchi*. If you can play instruments, bring them and accompany the songs.

(「ていんさぐの花」、なだ 「涙そうそう」その他の沖縄の歌をウチナーグチで歌いましょう。がっき 楽器ができる人は、ぼんそう 楽器を持ってきて伴奏しましょう。)

3. Let's participate in a *Kachaashii* dance and practice effective ways of communication through the dance.

(カチャーシーにさんか 参加し、おど 踊れるだけでなく踊りを通してとお 効果的なこうかてき コミュニケーションのほうほう 方法を実践じっせん してみましょう。)